広報 NのN 2004 NO.606

全力投球を誓う

特集

子どもたちの成長

写真　全国大会県予選で３位になり、西日本大会の出場権を獲得した根雨スポーツ少年団の２人のピッチャー。松原広学さん（左）と長尾隼さん（右）　記事 30 ページ

特集

子どもたちの成長

1週間、合宿所から学校に通う通学合宿。子どもたちだけの集団生活の中で、これまでの自分を振り返る。「家族と自分」「友達と自分」これからの自分を考えることで、自分探しをする。6泊7日の集団生活を通して子どもたちが成長していく姿を追った。

【特集】15ページまで

写真　通学合宿最終日にカワコ公園で遊ぶ子どもたち

自分たちで生活

自分の家を離れ、子どもたちだけで生活しながら学校に通った通学合宿。「自分の身の回りのことは自分でする」そんな1週間の集団生活の中で子どもたちは、自主性や協力し合うこと、行動することの大切さを身をもって感じた。

1週間の集団生活に 小学生21人が参加

自分の家を離れ、1週間の集団宿泊体験をする通学合宿が、6月20日から26日、日野町下菅にある日野高校寄宿舎「至誠寮（しせいりょう）」で行われました。

通学合宿には、町内の小学5・6年生21人が参加。子どもたちは、合宿所で集団生活をしながら学校に通いました。

自分を見つめ直し 自立する心を育てる

この通学合宿の目的は、家族と離れて過ごすことで「家族と自分」、集団生活の中で「友だちと自分」について考え、自分を見つめ直す。また、掃除や洗濯など自分の身の回りのことは自分でするということで、自ら考え自ら行動する「自立する気持ち」を育てようとするものです。

規則正しい生活は 朝6時起床から始まる

朝6時に起床し、掃除や朝食を済ませて学校へ。いつもどおりに学校生活を送り宿舎に帰る。夕食後、午後7時からは地域の人や先生の話を聞く「オセの話」や学習の時間。洗濯や入浴して午後10時には就寝というスケジュールの中で1週間を過ごしました。

不安な気持ちは消え 自主性が芽生える

入寮時は、全員不安な表情でしたが、3日目以降になると生活にも慣れたり仲間も増え「毎日が楽しい。家も恋しくない」と話していました。

このころから空いた時間の過ごし方を考え「今の時間を使って洗濯していいですか」などと自主性や行動力が見えてきました。緊張感が薄れてきたのもこのころで時間を守れず怒られたりもしました。

合宿生活も終盤を迎えるころには、食事当番でもないのに自分から進んで準備を手伝ったりと協力体制や仲間とのきずなも深まりました。

子どもたちを支えた 親的存在の食改さん

1週間、朝夕の食事を任された町食生活改善推進協議会（以下食改）。育ち盛りの子どもたちを思い栄養バランスに気を使いました。特に朝食については「米飯」にこだわりました。子どもたちの朝食はパン1枚で終わり―。そんな食生活に慣れているということで、朝食の大切さについて感じてもらい、正しい食生活を身につけてもらおうと「米飯」にしました。

食改さんは「正直、残飯が相当でると思った」と話していましたが、初日からほぼ全員が完食。子どもたちは「朝食を食べるといつもより頭がスッキリ」と話していました。

食改さんは、毎朝4時に起きて自宅の朝食準備をしてから午後5時過ぎに合宿所に集まり、子どもたちの食事を作りました。また、子どもたちに「昨日は眠れた?」「学校はどうだった?」と心配そうな子どもには声を掛けたりと母親的な存在でした。

盛りつけの仕方を教える食改さん

今までの自分 考えるきっかけに

1週間の通学合宿を通して、子どもたちは「今、何をしてどう行動すればいいのか」「助け合う気持ちと我慢すること」や友だちが手際よく洗濯する姿や黙々と勉強する姿を見て、今までの自分について考えるきっかけになりました。

この通学合宿は、県内では4年前から各町で取り組まれていますが、日野町では初めての試みということで、食事や余った時間、その意義など多くの課題が残りました。

至誠寮

1週間集団生活をした日野高校寄宿舎「至誠寮」。日野町下菅にあり、多くの日野高校生が巣立っていった。

先生ねー。そっと語り始め
子どもたちの目が輝くー。
地域の人や先生がいつもとは
違う話をした「オセの時間」
貴重な体験談は心に響いた。

地域の人や先生がいろいろな話をした「オセの時間」。いつもと違う先生は子どもたちにどう映る

家族ってなに

１週間、家族と離れての合宿生活。「家族って何だろう」距離を置くことで、家族と自分について考えさせてくれた。「うまく言えないけど家族っていいね」子どもたちはそう話した。

親元を離れて３日目 家族に手紙を書いた。

家族と離れて家族について考える

親元を離れて過ごす合宿生活―。洗濯、掃除など自分の身の回りのことは自分でやらなければなりませんでした。普段であれば親が、食事や洗濯、掃除などしてくれて何もしなくて用意されている。食べ物も好き嫌いが言え、テレビやゲームもある。今は、そんな豊かな環境の中で子どもたちは日々を過ごしています。

合宿生活の一つのねらいに、家族と離れた生活を送ることで、家族の存在について考えてほしいとありました。

合宿生活も3日目を迎えた6月22日の夜、家族に手紙を書きました。封筒の中には、返信用の封筒も添えて―。

手紙を書く前に「今まで親に手紙を書いたことがある人はいますか」と聞いたところ、21人中2人があると答えただけで、残りの19人は初めて親に手紙を書きました。

うまく言えないけど家族っていいね

子どもたちは、3日間のできごとや今の心境などを手紙に書きました。その時の表情はとてもやさしい顔をし、その思いを手紙に込めていました。封筒には、家族から自分宛ての返信封筒を入れて投かんしました。

3日後には、全員に家族から手紙が届き、その日の夜に手紙を読みました。何が書いてあったのかは、教えてくれませんでしたが、子どもたちは何度も家族からの手紙を読み返していました。

子どもたちに心境を聞くと「いつもいっしょにいるのが当たり前だし、掃除、洗濯、食事も用意してくれる。離れて見ることでいろいろ考えました。うまく言えないけど家族っていいね」と話してくれました。

家族と離れてその存在を知る

家族からの手紙は大切な宝物

家族と子どもたち考える良い機会に

通学合宿の期間中に保護者に話を聞くと「仲間とうまくやっているのか、どんな生活を送っているのか気になります。でも見に行くと意味がないので帰って来てからいろいろと話を聞きたい」と言っていました。

林間学校や修学旅行に行っても1週間離れるということはありません。この通学合宿を通して、子どもは家族について考え、家族は子どものいない生活の中で子どもへの思い、接し方について考える良い機会になりました。

楽しかっただけでも将来の良い経験に

合宿生活も終わり、子どもたちは普段の家庭、生活の中に戻りました。「楽しかっただけで、帰ってきても変わり

家族に手紙を書く子どもたち。

ない」と話を聞きましたが、今回、合宿に参加したからと言って、すぐに変われるものでしょうか。大人も自分の子どものころを思い出してください。その時には分からなくても将来きっと何かを感じる時がくると思います。今は楽しかっただけの思い出でも、自分自身で感じたこと、体験したできごとは、子どもたちの将来にきっと良い影響を与えてくれると思います。

子どもたちの声

根雨小学校の生徒と友だちになれてうれしかったです。合宿生活の中で、初めて自分でることがあってとてもよい体験になりました。自由時間にベッドの上でみんなで遊んだり、話したりしたことが楽しかったです。

黒坂小学校5年　西村賢人さん（福長）

1週間がんばれるか少し不安でした。みんなと花火をしたことが一番印象に残っています。途中で時間が守れなかったことを反省しています。何かしなくちゃいけないという気持ちが持てたのが良かったと思います。

根雨小学校5年　松本優奈さん（根雨）

みんなと過ごした生活は、ハプニングがいっぱいで楽しかったです。みんなで協力して力を合わせることを学びました。洗濯など家ではしないことを体験できたことも良かったです。ホタル探しがおもしろかったです。

根雨小学校6年　青木大地さん（舟場）

あっという間に1週間が過ぎました。先生や食改さんが親代わりになってくれたのでさびしくなかったです。食事がおいしいので朝からたくさん食べたら、元気いっぱいで何だかいつもより目がパッチリしました。

根雨小学校5年　窪田野々花さん（根雨）

１週間ともに生活した 21 人の仲間

通学合宿 PHOTO（おもいでフォト）

パチリ

いろいろあった集団生活を写真で紹介

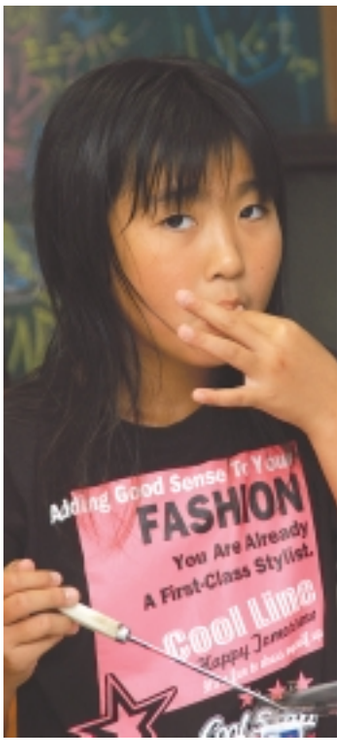
「ただいま」根雨小の子どもたちはバス通学

いつもと違った帰り道

朝から仲良くハミガキ

裸の付き合い

男子の部屋ってどんな感じかなと女子



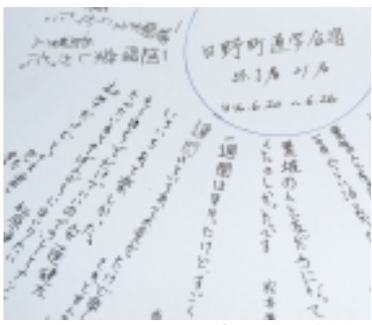
ちょっと味見

真剣なまなざし

楽しい夜は話がつきない

みんなが使う風呂をピカピカに

洗濯も自分たちで



みんなの思いがつまった色紙

子どもたちが生活した至誠寮

勉強も忘れずしっかりと

食事の配膳もみんなで協力

生きる力って

通学合宿では、自分たちで考え、行動しなければならなかった。学校教育は完全学校週5日制を導入し、自ら学び自ら考えて行動できる「生きる力」を育てようとしている。子どもたちが通学合宿で身をもって学んだ「生きる力」について考える。

ゆとりの中で生きる力を育てる

平成14年4月から学校教育に導入された「完全学校週5日制」。毎週土曜日が休みになり、子どもたちは学校外での時間が増えました。

完全学校週5日制と新しい学習指導要領は、一人ひとりの子どもたちが、自ら学び自ら考える力など「生きる力」を育てることが基本的なねらい。その「ゆとりの中で生きる力を育てる」教育も導入されてから2年3か月の月日が過ぎました。

家庭や地域の中でも多くを学ぶ子どもたち

学校教育の時間が減り、その分家庭や地域での時間が増え、今まで以上に家庭、地域の役割が大切になっています。

子どもたちは、学校の授業だけですべてを学んでいるのではなく、家庭や地域の中で過ごす時も、活動や体験を通して、多くのことを学び、日々成長しています。

教科の知識だけでなく、生活の中で必要なルールや思いやり、やさしさといった内面的なものをしっかりと学ばなければなりません。それらは、学校だけでなく家庭や地域社会など生活全体で学ぶもの。道徳観や正義感などは家庭や地域社会での体験が豊かであるほどしっかりと身についてきます。

子どもたちが充実した生活を過ごせるかどうかは、家庭や地域の取り組みが重要になってきます。それぞれが受け皿としての役割とは何なのかもう一度考えていかなければなりません。

自分から進んで学び・考え・行動する

生きる力とは―。子どもたちが自分で課題を見つけ、自分から進んで学び、考え、行動し、問題を解決する力。そして、他人のことを思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きていくための健康と体力。その力は豊かな心で心身ともに健康な人づくりへとつながります。

今回行われた通学合宿では「自分で気づき、考え、行動する」というテーマがありました。

小学校長に聞く

根雨小学校長 青戸 哲範

根雨小学校の「総合的な学習の時間」は、3年生が福祉、4年生が根雨地区の地理、5年生が食について、6年生が人権をテーマに取り組み、実際に地域に出かけたりして学んでいきます。

子どもたちには「自分の気持ち」や「相手の気持ち」を大切にする思いやりのある人間になってほしいと思います。

最近の子どもたちは、テレビゲームでよく遊びます。ゲームならすぐにリセットできてまた遊べますが、人生はそんなものではありません。それを教えてくれるのは、実体験の中での人と人とのふれあいであったりつながりだったりします。

人と人との関係はまず「あいさつ」から始まります。子どもたちにはだれにでも「あいさつ」のできる子になってほしいです。

学校を離れて、地域社会の中でさまざまな体験活動をすることで、自分から取り組んでいく自主性が生まれてくることを期待しています。

田植えから稲刈りまで子どもたちが育てる